

2022年4月17日（イースター礼拝）

イースターの恵み

ルカ 24：36～49

・イースターの持つ意味

本日、一緒に今年のイースターをお祝いする礼拝を神様にお届けしたいと思いません。イースターは言うまでもないことですが、喜び時です。しかし、この「イースターは喜び」という言葉は、決して自明のことではないと思います。そのことを、改めて強く思わされたことがありました。私は、今日、教会学校のイースター礼拝の説教を担当したのですが、イースター礼拝の聖書箇所として、マルコ福音書 16 章の復活を伝える言葉を読んだからなのです。空っぽになった墓を見て、イエス様が復活されたことを最初に示された婦人たちは、天使の「弟子たちに伝えよ」という言葉を聞いて、一体どうしたのでしょうか。嬉々として弟子たちに伝えたのでしょうか。実は、そうではありませんでした。「婦人たちは墓から出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。」、イースターの出来事に直面した時、恐ろしくなったということなのです。イースター、つまり、イエス様が死から復活された、その恵みに直面した人間は、まずは恐れてしまうということなのです。そして、受け入れられないということなのです。そのことをまずは受け止めなければならないと思います。

しかし、そのような恐れや不信の前に立っていた人たちが、どうしてその後イエス様が復活したということを経済中に知らせることになったのか。そうして、人々を変えていったものは何であったのか、そのことを受け止めたいと思います。そうして、真の意味での「イースターの恵み」に出会わせていただき、今年のイースターを共にお祝いしたいと思うのです。

・受け入れられなかった弟子たち

イエス様は、金曜日に十字架に磔にされ、その十字架上で「父よ、わたしの霊を御手に委ねます。」と叫ばれて、息を引き取られました。その後、安息日があり、その安息日が終わっての朝、つまり、日曜日の朝、婦人たちが墓に行くと墓が空っぽになっていました。天使から、イエス様が復活されたことを告げられて、墓を出ます。恐らく、大きな恐れと喜びが入り混じった思いだったと思いますが、ようやく、弟子たちのイエス様が復活したという知らせを伝えます。それを聞いた弟子たちは、どう思ったのでしょうか。「使徒たちは、この話（イエス様が復活したという婦人たちの話）がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。」とあります。弟子たちは、婦

人たちの知らせを信じることは出来ませんでした。更に二人の弟子たちが、復活されたイエス様に出会ったことを報告しました。けれども、残りの弟子たちは、そのことを聞いても、まだイエス様が復活されたことを受け入れることはありませんでした。

「こういうことを話していると」、二人の弟子たちが道で起こったことやイエス様であることが分かったということをお話している最中と言うことなのです。その時、イエス様が弟子たちの真ん中に立たれて、「あなたがたに平和があるように」と言われました。「平和があるように」とは、イエス様が生きられ時代では、神様との平和を祈る言葉であり、更に日常のあいさつとして用いられる言葉でもありました。そうして、皆の真ん中にイエス様は立たれていたのです。

その時、弟子たちはどう思ったのでしょうか。「ああ、イエス様だ」と喜んで受け入れたのでしょうか。そうではなかったのです。「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。」とあります。イエス様を「亡霊」、まあ幽霊のようなものだったということです。ずっと共に歩んできた先生を亡霊、幽霊と思うとはどういうことかと、まずは思うと思います。そして、婦人たちや二人の弟子たちからイエス様が復活されたことを告げられていたのです。それでも、弟子たちは受け入れられず、それどころか目の前にイエス様がいるのに、復活されたことを受け入れることができなかったのです。そのことは、一体どういうことだろうかと思えます。

私は、これこそ私たち人間の姿ではないかと思えます。イエス様が復活された、この聖書が伝える真実を受け入れることは決して容易いことではないと思えます。死人が復活する、そんなことが本当にあるのだろうか、誰もがまずは思うのです。それは、私たち人間の正直な思いなのです。どうしたら、信じる、つまり、受け入れることが出来るだろうかと思えます。こんな言葉をお聞きしたことがあります。もし、イエス様が復活された、その姿を直接見ることが出来れば、イエス様の復活を信じる事が出来るではないか、と。私たちは、弟子たちと違って直接イエス様の復活を見ているわけではない。だから、なかなかイエス様の復活を受け入れることが出来ないのではないか、そう思うこともあるかもしれません。しかし、直接イエス様の復活に直面することになった弟子たちは、復活を受け入れることができたでしょうか。できませんでした。ただできなかったというだけでないのです。事もあろうに、幽霊と見間違えたということなのです。

私は、考えさせられるのです。復活されたイエス様に直接お会いすることが出来ればと思うわけですがけれども、もし、私たちの目の前に3日前に死んだ人が立っているとしたら、それは誰もが驚きで腰を抜かしてしまうと思うのです。幽霊ではないかと思うのではないかと思うのです。まさに、ここで弟子たちがしたような反応をするのではないかと思えます。驚きのあまり決して受け入れられない弟子たちの姿は、私た

ちの姿でもあると思うのです。

・復活に生きる者への導き

イエス様を幽霊と見間違えた弟子たちの姿はまさに私たちの姿、このことを受け入れさせられる時に、本当に明確に思わされたことがあると思われました。それは、私たちと同じような状況にいる弟子たちが、世界中で復活の恵みを証していく者となったのです。ですから、弟子たちが信じる、受け入れていく道筋を辿れば、それは、私たちが信じる者へと至る道だということが分かると思うのです。私たちも、イエス様の復活の恵みに生きていきたいと思います。そのために、一体何が必要なのでしょうか。

イエス様は、まず弟子たちに「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。」とおっしゃっているのです。「どうして心に疑いを起こすのか」、私は、この言葉の前に立つ時、本当に自分が問われるような感じがしました。どうして心に疑いを起こすのか、イエス様から叱責されているような思いがしました。「どうして心に疑いを起こすのか」、「疑い」、これこそが、イエス様の復活を受け入れることを阻んでいるものだということなのです。けれども、この疑いの正体を、私たちは本当には分かっていないのかもしれない。

イエス様がここで「疑い」と言われている言葉は、聖書の記されている元の言葉に遡ってみますと、ちょっと驚くような言い方で、イエス様は言っておられるのです。この「疑い」を辞書で引きますと、最初に出てくる意味は実は「熟考」や「考え」ということなのです。その意味合いを捉えて、私なりに訳してみますと、「なぜ心の中であれこれと考えているのか」、こんな感じなのです。弟子たちは、あれこれと考えているのです。そして、そう考えている根本にある思いは、考えていけばちゃんと自分分かると思っていることなのです。つまり、復活についてもちゃんと分かることができる。そして、自分が納得できるような説明を受けたらなら、「分かりました」と受け入れることができると思っている。しかし、本当にそうだろうかということなのです。本当には、分かっていないのではないかとということなのです。

しかし、そういう弟子たちに対して、「結局お前たちは分かってない」と、イエス様は言っておられるわけではないのです。そういう思いの弟子たちに対して、大切なことを示されるのです。イエス様は、実際に手と足を見せられるということです。更に、焼いた魚を食べられるのです。最初イエス様は何をしているのか、よく和歌ならない思いがしました。しかし、イエス様が何をしておられるのかが、だんだん分かってくるような思いがしました。それは、復活は真実なのだろうか、幻想なのだろうか、そういうことであれこれ考えている所から離れて、率直に私を見なさいと、イエス様は

弟子たちに語り掛けておられるということです。手と足、それは、実際に打ち付けられた釘の跡がある手足であると思いますが、それを見せられるのです。そして、かつてと同じように、食事をとられる。今、目の前にいる私をそのまま見なさいということなのです。

・心の目を開かれる

そして、イエス様は弟子たちが復活を信じる、つまり、受け入れて生きることが出来るように、大切なことをなさるのです。ただ、ご自分の手と足を見せられるだけではないのです。魚を食べられただけではないのです。更に大切なものを弟子たちに与えてくださるのです。それは言葉なのです。

「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いている事柄は、必ずすべて実現する。」、ここでのモーセの律法と預言者の書と詩編とは、間の説明を省いて結論だけ言えば、聖書なのです。それも、特に旧約聖書ということなのです。そして、イエス様がこう言われることは、単に聖書に書かれていることがその通り実現するというようなことではなく、神様の約束はその通りに実現をする、そのことをお示しになっているのです。イエス様が弟子たちと共に歩む中で、ずっとお示しになられたことは、結局、神様の約束はその通りに実現をするということなのです。神様の約束の言葉は、虚しくなることは決してないのです。そのことをずっとお示しになってきたのです。

そして、この言葉。「聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて」、この言葉に改めて出会わされて、ああなるほどと強く思わされたのです。イエス様は、弟子たちの心の目を開いてくださったのです。心の目、信仰の目と言ってもよいと思います。私たちも心の目、信仰の目は閉じられたままなのです。そして、自分で開くことは出来ない。どんなに、ちゃんと見る事が出来るようにとどんなに願ったとしても、私たちは独力で心の目を開くことは出来ません。しかし、開く時が来る。神様が開いてくださるからです。なぜ、私たちの心の目を開いてくださるのでしょうか。それには、目的があるのです。「聖書を悟らせるために」ということなのです。「聖書を悟る」、勿論、一つ一つの聖書の言葉が分かるということも当然含まれると思いますが、この言葉の持っている意味は、もっと大きく深いことを思います。この聖書は、聖書全体ということなのです。そして、聖書全体を通して、神様が私たちにお伝えくださっていることは、一体なのでしょう。それは、神様の約束の言葉はその通りに実現をする、それも、イエス様を通して実現をする、そのことなのです。

「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、3日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝え

られる。』と。私は、このイエス様の言葉に、衝撃を受けました。恥ずかしながら、この言葉の持っている本当の意味を、自分は全く受け止めていなかったということを感じたのです。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、3日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』と。この『』で言われていることが、聖書、つまり、私たちが言うところの旧約聖書に書いてあると、イエス様は言われているのです。しかし、考えて見まして、これはそのままで分らないと、まず思いました。聖書知識の試験があるとすれば、不合格になってしまうということになりかねません。なぜなら、この『』が旧約聖書にそのままに出ているのではないからです。しかし、そう私が思っていたことは、結局心の目が塞がれていたからだなあと強く思われました。

イエス様が言おうとされているのか、この言葉が文字通り旧約聖書に出てきます、その約束は決して虚しくなりません、そういうことではないのです。イエス様の十字架によって、人間の罪が赦され神様との関係が取り戻されること、そして、復活によってその神様との交わりが死をも越えることが示されているということ。旧約聖書において示されているのは、そういう人間を愛する神様の深い愛なのです。そして、人間を愛するがゆえに、救い主を死に引き渡す、そこまで深い愛であるということなのです。旧約聖書とは、個々の言葉においてではなく、その全体で、この神様の御心を告げているのです。そして、この御心は決して変わることがない。そのことこそ、聖書に書かれていることなのです。

そして、旧約聖書全体、私たちが言うならば聖書全体で伝えられているのは、結局神様の愛なのです。それも、最も大切な御子の命を捨てても成就されるほど、深く大きな愛なのです。そのことを知らされることこそ、「心の目を開かれる」ことなのです。そうして、イエス様の御姿を通して、神様の愛を知らされていくのです。その愛の深さです。そして、私たちが心の目を開いていくために、本当に必要なものがあります。それは、イエス様の言葉なのです。イエス様の言葉を聞く時に、私たちは神様の愛が分かるのです。

・復活の恵みに生きる

そして、心の目を開いて、この復活の恵みの前に立ってみるとどうでしょうか。ここに示されている本当に驚くような恵みに出会わされるのです。金曜日の受難日祈禱会で、マルコによる福音書の十字架の姿を伝える言葉から、松浦先生が奨励してくださいました。私は、それを聞きながら、改めてイエス様が十字架上で叫ばれた「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」という言葉の重さを、受け止めさせられました。これは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになりましたか」という意味の言葉です。

イエス様は、ここで死に向かわれる。死の直面した人間は、誰もが孤独を感じます。ただ一人で死んでいくのではないか。神様からも引き離されてしまうのではないか。そういう人間の苦悩の極限の道を、イエス様は実際に歩まれたのです。その孤独苦しみ、寂しさ、悲しみ、その全てを味わい尽くしてくださったのです。なぜならば、イエス様は実際死なれたからです。

しかし、もし、それでおしまいと言うことであれば、結局全ては死を持って終わると受け止めなければならないと思います。しかし、神様は、私たちのために、驚くようなことを用意されたのです。それは、イエス様の復活です。復活、つまり、死が打ち破られたことです。全てを遮断する、全ての飲み込む、そういう力があるように思っている死が、敗北したのです。イエス様の復活によって、死は神様に勝つことが出来なかったことが示されるのです。つまり、私たちと神様との交わりは、死をもってしても切れることがない。永遠の絆であることが、事実示されたのです。それこそが、イエス様の復活の指示していることなのです。それを信じる、つまり、受け入れる歩みへと、神様は私たちに招いておられるのです。

勿論、招きですから、拒絶することも可能だと思えます、しかし、もし拒絶するならば、私たちは結局今もなお、死に支配された生を生きていることに過ぎなくなり、どこかに虚しさを抱えつつ、死への恐れを見て見ぬふりで生きるしかないと思えます。それで、目に見える結果に一喜一憂することが全て、そういう生を生きるしかなくなるのです。

けれども、イエス様は招かれるのです。「私の復活を受け入れて歩みなさい」と。心の目を開かれて、私の与える神様との永遠の絆に生きよと命じられるのです。そして、そのことを受け入れることは、新しい使命を与えられることでもあります。イエス様は『「また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』と。エルサレムから初めて、ああなたがたはこれらのことの証人になる。」、あらゆる国に、この福音が伝えられていく。そして、そのことのための証人にあなたがたはなると、弟子たちに言われるのです。更に、そのために必要な神の力である聖霊を与えるとまで、約束してくださったのです。

そうして、イエス様が復活された、このイースターの喜びの知らせは、世界中に広がったのです。打ちひしがれているような人を立たせていったのです。そして、その喜ばしいイースターの知らせは、2000年の間、ずっと生き生きとした力を持って伝えられていきました。更に、イエス様が生きられたユダヤからははるかに遠い国々まで伝えられたのです。この日本に住む私たちにまで届けられているのです。時代を超え、地域を超え、イースターの恵みは伝えられていきました。それは、人間の熱心や願望によってなされたということでは決して説明がつかないと思います。そこに、驚

くべき神様の御業があった、その恵みに出会った一人一人がいた、ということだと思
います。

ある牧師は、イエス様が復活なされた、その何よりの証拠は、教会が2000年間歩
み続けたこと、そして、世界中に広がったことだと言っています。私もそう思います。
イエス様が復活された、そのことによって神様の驚くべき愛が示されている、その恵
みの中を是非生きてほしい、イエス様は今日、私たちを招かれているのです。その招
きに応じて、復活に示される神様の愛に生きる者として歩んでいきたいと心より願
います。